

## 広島・草戸千軒町遺跡

1 所在地 広島県福山市草戸町

2 調査期間 第四二・四三次調査 一九八九年(平1)四月～一九九〇年六月

3 発掘機関 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

4 調査担当者 代表 松下正司

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 平安時代～江戸時代(中心は主に鎌倉・室町時代)

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

第四二・四三次調査区は、遺跡包蔵中州の南部に位置し、東西二〇～四〇m、南北約一〇〇mの約三九〇〇m<sup>2</sup>である。この調査区では、主に室町時代の様相が明らかになった。

室町時代前半では、遺跡南半部に広がる東西柵群が引続き展開し



第42・43次調査位置図

(東西柵1～5)、町割の骨組みをなし、内部に井戸1・2や数多くの土坑や柱穴がみられる。

室町時代後半には、調査区を取囲むように、一辺約一〇〇m、幅一〇～一五mの環濠(溝1・20)が巡り、内部を区画するように溝3が掘られ、堅固な石列を持つ溝16や当遺跡では最大の石組井戸4などが設けられていた。検出遺構や出土遺物の様相から、この環濠に囲まれる地区は、民家が建ち並ぶ集落ではなく、一つの居館的な要素が濃いものと考えられる。

木簡は、室町時代前半では池2、室町時代後半では、溝1・20、溝3、井戸4から出土しており、付札・帳簿的なもの、御札・呪符、聞香札と考えられるものなど、様々な性格のものがある。

池2は南北九m、東西四mの方形のもので、当初は集落の区画施設の機能を有していたが、その後西側から炭・灰や焼けた礫が大量に投棄されており、火災後の廃棄場所になっている。この炭・灰・礫層の中に呪符が含まれており、他にも白磁水注、四耳壺、備前焼小壺、炭化米、壁土等が出土している。

溝1・20は、一九七五年の第一五～一七次調査で明らかになった環濠SD七六〇である。溝3は、長さ三五m、幅五mほどのもので、当初はSD七六〇と合流していたが、やがて合流部は埋め立てられて通路にされている。一九七五年の調査では、SD七六〇から明応二年(一四九三)銘の板塔婆が出土していたが、今回溝3から明応四

年（一四九五）銘の御札が出土した。

溝3からは大量の土器類を始め、多種多様な木製品類、鉄製熊手、茶臼等の膨大な遺物が出土し、特に紀年銘御札の出土は土器類の編年を考える上で貴重なものになった。このSD七六〇・溝3からは、御札の他にも、呪符、付札・帳簿的なものが出土した。

井戸4は内径一・三mの石組井戸で、内部には大量の土器類・木製品類の他に、鎧の小札もみられた。そして聞香札と考えられるものが一四点出土した。

# 8 木簡の积文・内容

## 池2

(1) 「

SD七六〇

(266.5)×24.5×6 174

(3)

「五〇九日

まへ

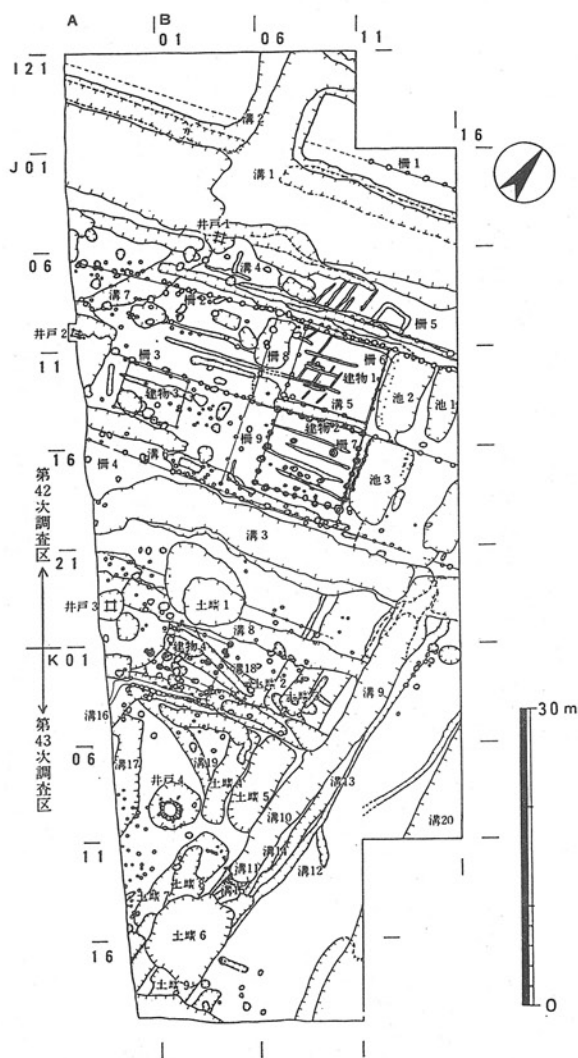
95×26.5×12 102

(2)

「急々如律令カ」

「丁カ」

(309)×45×3 174



第42・43次調査区遺構図

溝  
3

(4) 「(四仏) <sup>(梵字)</sup>□奉修正三 340×67.5×6 173

(5) 「 明應三年

(四仏) □□看誦修正三ヶ日 <sup>(宿カ)</sup>□□□□□□ <sup>(法カ)</sup>□□守護 411.5×59.5×4.5 173

(6) 「(四仏) 々々咄吠呢(符籙) 196.5×60.5×5 174

(7) ・「<sup>〵</sup>刀二助二郎」

・「<sup>〵</sup>久助二郎 <sup>(あてカ)</sup>□□ 103×24.5×4 111

(8) ・「 <sup>(すカ)</sup>ま□

○ 二斗二升

はくまい」

・「○十二月十九日」 98.5×42.5×11 102

井戸  
4

(9) 「一」 35.5×(16)×2

(10) 「一」 34×18.5×2.5

(11) 「三」 (23.5)×(17.5)×2

(12) ・「ウ」

・「□」 36×(11)×2

(13) 「二□」 36.5×18×2

(14) ・「一」 34×20×2.5

・「すち」

(15) ・「二」 34×18×2

・「わかな」

(16) ・「二」 36.5×21×3

・「あふひ」

(17) ・「一」 42×20.5×3

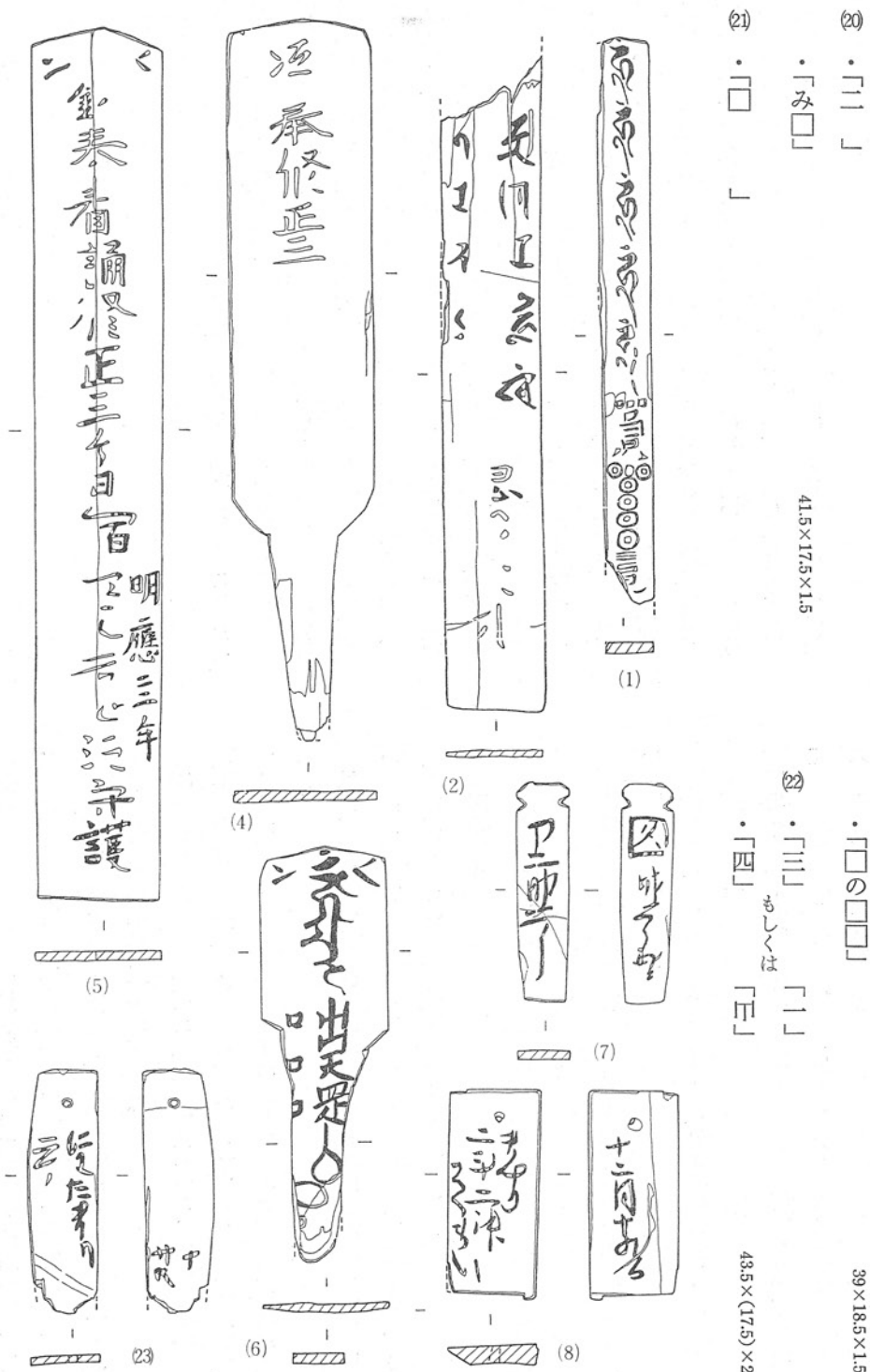
・「はゝきん」

(18) ・「□」 40.5×17×3

・「わかな」

(19) ・「一」 40×(11.5)×2

・「あふひ」



・「○に□たま□

□□

・□

○廿文

(113.5)×33×6 102

これらの木簡の中で特に注目されるのが(9)～(22)である。これらは四種類の素材を「一・二・三・客(ウ)」に仮定して競う四種茶勝負ないし十種香、即ち闘茶もしくは闘香に使用されたものと考えられる。一般に闘茶は室町時代中頃に衰退したと言われるが、この井戸内の共伴遺物の中心は戦国時代の初期である。そして(14)～(19)には、「すま」「わかな」「あふひ」「はゝきゝ」と『源氏物語』の巻名が記されているが、闘香の方法の中に「源氏香」があることが注目される。文亀元年(一五〇二)の『後法興院政家記』(近衛政家の日記)に源氏香の記載が見えるが実際の方法は不明で、現在に伝わる方法は、五種類各五包の順次の異同を嗅ぎわけて、計五二通りになる組合せを、それぞれ『源氏物語』の巻名にあててのもので、様式の完成は江戸時代初期の寛永年間と言われる。源氏香の存在や時代背景を考慮すれば、これらは闘香に使用された可能性が高いと考えられるが、方法としては数字が示すように十種香で、巻名は参加者を特定するためのものであろう。闘香札の出土例は一乗谷朝倉氏遺跡に続いて二例目である。

(7)の図は屋号と考えられるもので、当遺跡では初例である。「刀二」の意味が不明だが、この屋号を持つ商家から助二郎に宛てられた刀二本の付札とも考えられる。ただ助二郎に敬称が付いておらず、商家と助二郎の関係に一考を要する。

(4)(5)は共に修正会に関わる御札と考えられる。(5)の二文字目は、「奉」ないし「奏」とみられる。(6)は梵字で不動明王を記した呪符であるが、下部は削られて杓子のようなものに再加工されたものである。

以上、主なものについてのみ簡単に触れた。前述したように、この地区は一つの居館的なものとして捉えるのが妥当であり、今回出土した木簡もそのことを背景とするものであろう。

## 9 関係文献

田邊英男・下津間康夫・福島政文・鈴木康之「草戸千軒町遺跡第42・43次調査略報」『草戸千軒』№203 一九九〇年

下津間康夫「草戸千軒町遺跡第43次調査区出土の『闘香札』について」『草戸千軒』№197 一九八九年

志田原重人「正月の仏教行事——『修正会』に関する覚書——」『草戸千軒』№205 一九九〇年

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡——第四二～四五次発掘調査概要——』(広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報 一九八九・一九九〇 一九九一年刊行予定) (下津間康夫)